

(95.7.15)

モスクワ、バルセロナ

高部英明

いつも旅に出る前は憂鬱である。仕事とはいへ、家族を残して一人で出ていくなんて、やめようかと考えてしまう。でも相手があることだし、と重い腰を上げる。しかし、いざ外国に着いてみると、いつも「来て良かった」となる。新鮮さ、非日常性、新しい人・話題との出会い。心の中に深く刻まれていく。

今回は第1週目(6/14-16)がモスクワでのISTC (International Science & Technology Center) のワークショップ (Rozanov project) 参加。第2週目(6/20-24)が東大天文の野本氏に誘われてバルセロナで開かれたNATO Advanced Study Institute の超新星 (SuperNova; S N) 会議出席でした。印象を箇条書き風にまとめると、

(モスクワ)

1ドル5000ルーブル。3年前来た時が100ルーブル。3年で50倍のインフレ。物価は日本並。ただし公共料金はインフレについていけず安い。例えば、バス代は1回8円。プロジェクトメンバーの1人タッチアーナという女性研究者と話した。このプロジェクトのため週2回レベデフ研究所に通っている。しかし、月にもらえる金額は70ドル。他のプロジェクトの分も合わせて良くて月200ドルとか。きれいな服装をしてるので、「どうやって生活しているの」と聞くと、笑って答えない。

若い人が科学を離れてビジネスで金儲け。MISINレーザーグループのヘッドKovalskyが嘆いていた。ロシアだけのことではない。そういえば、日本もバブルのころは工学部電気工学出身が銀行屋になってた。日本の戦後もそうだったが、女性が強い。男性(特に中年)はソ連崩壊で自信喪失。しかし、女性は現実を見つめ力強く生きているとの感を持った。

モスクワの町の印象。「安全」、「便利」、「親切」。この国はちゃんと機能している。クレムリン宮殿内の教会を見学して、以下のような印象を持った。宗教を否定したポリシェビキ-が何故これを破壊しなかったのか。「文化はイデオロギ-より強し」なのか。70年後の今日を当初から予想していたのか。やはり破壊する自信がなかったんだ。メシュコフ(Meshkov : R-M不安定で有名な彼は画家でもある)に連れられて訪れたトレチャコフ美術館。革命前の作品多数。革命は何を生んだのだ。モスクワ、暑かった(日中気温30度)。日没10時ごろ。11時でもまだ明るい。

(バルセロナ)

いい町だ。退職したらこんな所で暮らすのもいいかな。ガウディの町、ふれ合いの場としての新しい港作り。日没の遅いこの季節、夜、町中は人であふれる。歩道が続くランプラス通りにはストリート・パフォーマンス、ミュージシャンと、行く人を楽しませてくれる。

会議があったのは仏国境に近い三方を地中海に囲まれた国営ホテル。ところが、会議がハードで、毎日、午前の部(9時-2時)午後の部(5時-9時)と続いた。会場の窓から地中海を眺めながら、頭の中は宇宙の果ての星の爆発でいっぱいの1週間であった。私は1週間で帰ったが、会議は2週間続く。参加者100名内学生40名程度。超新星爆発の物理分野の指導的研究者は1人2-3回は講演する。1回1時間。話題も一部重なるが、それぞれの先生の考え方がよくわかって面白い。

宇宙は論客が多く議論が沸騰する。SN爆発時の流体力学的不安定や物質混合が3日間議論された。2次元3次元のシミュレーションをやっており、「レーザー核融合も負けとれん」が正直な感想。レーザー核融合分野からの唯一の参加者の私は流体不安定と物質混合について40分喋ってきた。

(ISTC+SN)

2つの毛色の異なる会議に出た結論。ロシアでは多くの研究者から共同研究したいと渴望された。レーザー研の実験データがほしい、シミュレーションをぜひやりたいと。超新星の会議では観測所の連中が観測された超新星に、たとえばSN1991bgという具合に名をつけ、詳細なデータを世界中の研究者に発信している。従って、会議でも「SN1991bgの超新星は云々で」と言及すると、「いや、あれは云々だ」と、皆が自分なりの解析イメージを持っている。データの世界共有が当たりまえなのである。レーザー核融合も、もっと開かれた研究社会となるべきで、そのための第一ステップとして、レーザー研のデータを世界中に公開することが必要と強く感じた。つまり

ILE, the world Laser Fusion Observatory

としての役を担うべし、ということです。これが「ISTC+SN」の答。